11.5　桃、栗三年

栗や柿の美味しい季節です。一昨日ちょっと遅れ気味の栗ご飯をいただいて、デザートに柿。だからというわけじゃないけど。

桃、栗　三年　柿　八年

この言葉、誰もが知っていると思うのですが、その意味については、意外と「えっどういう意味だっけ」という人が多いようです。

説明するのは少し気が引けるところがありますが、これ、
「どんなものでも実をなす(成果を上げる)には相応の時間がいる」ということで、
「ものごとは取りかかってすぐに成果が出るものではない」ということを意味しています。

最近のアメリカかぶれの経営者に、改めて聞かせてやりたい言葉ですね。

さて、「桃、栗三年　柿八年」まではいいのですが、これに続くフレーズということになると、これは地域によって、人によって、いろいろの場合があるようです。

最も多いのが、「ユズ（柚子）の大馬鹿　十八年」というものでしょう。
私の故郷では、「大馬鹿」のところを「大馬鹿野郎」といっていました。
ちょっと品がないなあ。
次いで、「ナシ（梨）の馬鹿めは十八年」
その他にも、「ユズ（柚子）は九年でなりかかる、梅は酸いとて十八年」というものもあります。

植物学的に見て、実際のところは、どうなのでしょうか？
まず、柚子については、実生の場合（種から育てると）、収穫できる程度に実がなるまで18年程度かかるというのは、事実のようです。これは、有名な柚子の産地のプロの方が語っておられました。
しかし、最近は、枳殻(からたち)の木の台に接ぎ木するのが普通のようで、その場合は、4年程度で実がなるようです。

では、梨はどうか。
昔見た映画「時をかける少女」では、「桃栗三年　柿八年、柚子は九年で成り下がる、梨の馬鹿めが十八年」と言っていましたが、これは、見た人が多かったせいか「梨が 18 年」説に大いに影響がありましたね。

（ところで、原田知世、可愛かったなあ。個人的には原田貴和子の方がよかったけど。）…脱線です。

しかし、梨は、実際のところ、柿と同じ程度の８年程度で実がなるようで、科学的？にはやや問題があるようです。おそらく、語呂が良いために、使われたのではないかと思います。

ちなみに、柚子と梨は、可哀想に馬鹿者扱いをされていますが、これはなかなか実を付けないため世の中から愚か者扱いされているけれど、遅くても努力をすれば立派に実を付けるんだという意味だと、こころやさしい作家の壺井栄さんは仰有っています。

江戸時代の著名な有識者「山東京伝」の書いたものの中では、さすがに社会派学者だけあって、この部分は、
「桃 栗 三年 柿八年、九年面壁 十年の苦界」となっています。
「九年面壁」は達磨さんのことを指しており、「十年の苦界」は女郎さんの年期のことを指しています。

こうなってきますと、最初に私が言いました「ものごとは取りかかってすぐに成果が出るものではない」という説明と少し意味が違ってきますね。

最後に、出所不明のもの。
「桃　栗　三年、柿　八年、柚子の大馬鹿十八年、銀杏の気違い三十年、妻の不作は六十年、亭主の不作はこれまた一生、あぁ～あコリャ、コリャ」

えーと、これは決して私が創作したものではありませんので、誤解のないように。

11.10　タイ焼きのご先祖

秋も深まり、そろそろ､温かいものが恋しい季節になってきました。

食事なら鍋。お酒なら熱燗。
おやつなら焼き芋。

ということで､近くのスーパーに石焼き芋を買いに行ったのですが､残念ながら売り切れ。
誰でも思うことは一緒なんですねぇ。

少し恨めしげに焼き釜を眺めていたその先に、「今川焼き」の大きな赤い旗。
温かいのと甘いのということでは一緒ということで、こちらにしました。
1ヶ 80 円。安い！

若い頃、東京に出てきた時に、今川焼きの看板を見て、どんなものかと覗いてみると、なぁーんだ、回転焼きのこと。

これは、江戸時代の中頃、神田の今川橋の袂にあった菓子屋が売り出したのが名前の由来で、今川義元クンとは縁もゆかりもありません。
JR の神田の駅を出てすぐ東のところです。
だいたい関東では、今川焼きと呼ばれているのですが、この食べ物ほど、各地で違う名前で呼ばれているものも珍しいのですね。

一般的には、西日本では回転焼き。
大判（小判）焼き、太鼓（太閤）焼き、夫婦焼き、二重焼き、甘太郎焼き等々。
無数に変名があるようです。
変わったところでは、姫路の「御座候」。
何ですかね、この名前は。

大体は、形から来ているようですが、
太鼓焼きは、太鼓のまん丸な形から命名。
大判小判は、かつて楕円形をしていた様なのですが、今は、鉄板の型のせいでまん丸になってしまったものが多いようです。
焼き方から来ているのが、夫婦焼き、二重焼きなど。

普通の太鼓焼きの場合、型の上に生地を乗せ、その上に餡を乗せ、その上からまた生地を乗せて、ひっくり返して作るのが普通なのですが、夫婦焼きと呼ばれるのは、一方の型には、生地の上に餡を乗せ、もう一方の型には生地のみを入れて、両方をドッキングさせて作ることからきたものです。
回転焼きも、型が回転するから回転焼き。

最近は、小豆餡の代わりにいろんなものが入ったものが出てきました。
カスタードクリームはもう常識ですが、これはちょっと苦手。
中のクリームが熱くて、よく舌をヤケドします。

ちょっと前に、アメリカのビバリーヒルズでこの今川焼きが大評判という記事を見ましたが、普通の小豆あんのものは、「スウィート･ゲイシャ」という名前がついていました。
他に、バナナが入っている「ハラジュク・モンキー」。
「ハニー･ヤクザ」ってのは、蜂蜜に、イチジクとヤギのチーズ入りだそうです。
どうですかね？
う一一ん、寿司にも変なのがあるからねぇ。

ところで、「鯛焼き」は、今川焼きがご先祖です。
明治 42 年、麻布十番の「浪花屋総本店」が今川焼きと人形焼きをドッキングして作り出したのがはじめだそうです。
はじめは、いろんな動物の形があったらしいのですが、次第に鯛だけが生き残ったようです。
さすが、鯛！

このお店、今でもあるのですが、行ってみますと、なんと一尾ずつ焼いていました。
うちの近くのたい焼きやさんは、10 尾くらいを一度に焼いています。

ものの本によりますと、1 尾ずつ焼いたものは「天然物」と呼ばれ、一度に沢山焼くものは「養殖物」と呼ばれるそうです。
どこが違うかって？
なんでも、火の通り方が違うので、外はカラッと、中はしっとりだそうですよ。
ちなみに、泳げタイ焼きクンは、ここ浪花屋の天然物。イキがいいから逃げ出したそうです。

タイ焼きも 100 年近く経つと、頭から食べるのか、しっぽから食べるのか、正統論争が起きていましたが、これは、頭から食べるのが老舗の伝統だとか。

曰く、もともと、しっぽは、指でつまんで食べるための取っ手だそうで、家で手を洗って食べるようなものではなく、外で手が汚いときでも食べられるように、餡を入れず、胴体まで食べ終わったら、捨ててしまえるようにしてあるとのことでした。
さすがに、日本の食べ物、ホットドックなんかより、ずっと神経が行き届いていますねぇ。

最後に、「楢山節考」で有名な「深沢七郎」さん、なんと自分で今川焼きの店を出し、大当たりをしたと書いています。
昭和 46 年、東武曳舟駅前の「夢屋」さん。
たった 8 日間、修行に行っただけで繁盛したのですから、たいしたものなのか、誰にでもできるということなのか、暇になったら、ボクもやってみようかなあ。

11.15　天神様と七五三

今日は七五三。
うちの近くの天神さんでも、晴れ着を着た子供（を連れた親とお爺とお婆）が沢山いましたね。

昔からの言い伝えでは、数え七歳まで、子供は神様からの預かりもので、この間に亡くなっても、それは神様のご意思。
数え七つになると、子供は、神の手を離れて人間社会に仲間入りすることになります。

七五三のうち、七つのお参りは、それまで庇護してくれた神様に、無事に生きてこれたことのお礼を申し上げるという意味があるものなんですね。
七歳以降、子供は、神様の手を離れて生きていかねばならない。七五三は、このような通過儀式として重要な意味を与えられていたらしいのです。

でもね、私、この七五三という一見晴れやかなお参り、なんとなく気持ちが悪いのですね。
はっきりした理由がないのに、モノを言うのは不本意なのですが、すっきりしない理由の一つは、あの「通りゃんせ」の歌。

♪　**通りゃんせ　通りゃんせ　　ここはどこの　細通じゃ**
　　天神様の　細道じゃ
　　ちっと通して　くだしゃんせ
　　御用のないもの　通しゃせぬ
　　この子の七つの　お祝いに お札を納めに　参ります
　　行きはよいよい　帰りはこわい　　こわいながらも 通りゃんせ　通りゃんせ

この歌、明らかに七五三の七つのお参りのことを歌ってますよね。
ハレのお礼参りなのに、この歌からは、何となく不吉な感じがしませんか？

思うに、それはおそらく、歌詞の中の「行きはよいよい　帰りはこわい」に原因があるのではないでしょうか。
この歌、作詞者不明で、この部分の歌詞の意味も、いくつもの解釈があってはっきりしないのですね。
なかには、この歌の中の天神様のモデルと言われている三芳野神社が川越城の中にあったことから、帰りの城番のチェックが厳しいというこじつけのような説まであるのです。

でも、この歌の 2 番の歌詞を見てください。

♪　**通りゃんせ　通りゃんせ**
　　ここは冥府の細道じゃ　　鬼神様の　細道じゃ
　　ちっと通して　くだしゃんせ
　　贄のないもの　通しゃせぬ
　　この子の七つの　弔いに　　供養を頼みに　参ります
　　行きはよいよい　帰りはこわい　　こわいながらも 通りゃんせ　通りゃんせ

2 番、聞いたことありました？
こうなると、こわいですね。

そもそも、天神様というのは、誰でも知っているように、菅原道真さんのことですね。
この方、今でこそ、学問の神様などと言われていますけど、ちょっと前までは、日本の歴史上、最大の怨霊でした。

その昔、道真クンが左遷されて、恨みを呑んで死んだあと、左遷に関係した者が次々と死に、疫病が流行り、天災が続出します。
誣告した藤原菅根、政敵藤原時平に留まらず、道真クンの後任の右大臣源光、時平縁故の保明皇太子、次の皇太子の慶頼親王が連続して亡くなり、清涼殿に雷が落ち、多数の貴族が死に、道真を追放した醍醐天皇が病死するに至って、遂に、祟りをおさめるため、彼を神にするしかなくなったのですね。

冥府から現れて、現世に災厄をもたらす史上最大の怨霊としての性格と
神となり、民を守る守護神としての性格の双方を兼ね持つ存在。

まあ、庶民としては、こわごわながらも、都合の良い方を頼る（通る）しかないんですけどね。
この歌、頼った後、きちんとお礼をしなければ、コワーイことになりますよ、って聞こえませんかね。

ところで、菅原道真クンがなったのは天神サマ。
天神というのは、観自在天のことで、大黒天（大黒サマ）、弁財天（弁天サマ）と同じレベルで、天部に所属する神様です。
前に、申し上げましたように、神仏習合では、天人の世界にも厳密な序列がありまして、上から順に、如来部、菩薩部、明王部、天部というクラス構成になっているようです。

天神サマは、一番下のクラスですけど、なんとなく人間サマに近いような気がするし、なんと言っても、頭のいい人が怨霊で出てきて、祟られるほど怖いものはありませんから、ひたすら「うちの孫をよろしく」と頼むしかないようですねぇ。

11.19　神在月

神無月が、八百万の神々が出雲に出向かれて、神さまがお留守の月だから、出雲以外の国では神無し月というのは、いかにももっともらしい出鱈目。にも関わらず、出雲の側も自分のところは神在月だなんて言ってるみたいだけれど、ちょっとこれは調子に乗りすぎですねぇ。

そんなことはともかくとして、旧暦 10 月 10 日（今年は 11 月 15 日）に、全国各地から八百万の神様方が、出雲の稲佐の浜にお集まりになるそうなので、これをお迎えする「神迎え神事」が行われることは確かです。
今年これを見に行った方々の報告によりますと、今年の「神迎え神事」は、降っていた雨が神事の間だけ止み、神威を感じたと多くの方が仰有っていますから、やはり何かがあるのでしょうかね。

神様方の集合場所は、稲佐浜の仮宮社。
神様方、直接、それぞれバラバラに出雲大社に行くわけではないのですね。
お集まりになった神様方は、次の日の 11 日から 17 日までの 1 週間、ゾロゾロと場所を出雲大社に移して、会議をされることになっています。

えっ、会議の議題は何かって？

私も、出席して傍聴したいのですが、残念ながら神ならぬ身、許されておりませんので、議題は公式文書と噂から推測するしかありません。

まず、公式文書の方ですが、これは「日本書紀」に書かれている「国譲り」の際に大国主命が天照神に対して言った言葉、
「吾所治顕露事者、皇孫當治。吾将退治幽事。」　(日本書紀神代下第 9 段)
「現世の政事は、天照神、あなた方がお治めください。私は、幽（かく）れたる神事を治めます」
と記録されている部分です。
これは、政事(まつりごと)は天照系に譲るけれど、「幽（かく）れたる神事」つまり人の世の「目には見えない縁」に関することは、自分たちの方で取り仕切らせてもらいますということのようです。

このことについてはいろんな説があるようですが、私が勝手に推測するには、大国主命系が担当するのは、誰と誰は結婚させても良いかとか、離婚させたほうがいいのではとか、いうものじゃあないですかね。違いますかね。
だとすると、私たちにとっては、極めて重要なものですよね。

男女の縁をはじめとする人の世の様々な縁は、出雲の大国主命系の八百万の神様の専権事

項だとすると、天照系の神様に頼んでもダメということですねぇ。
もしそうだとしたら、もっとはっきりしておいてもらわないと困りますよね。
お願い事、何でも承ります、なんて言っておいて、この件の所管は、別口の神様ですと言うのでは、お賽銭の詐取に当たりませんか？
神様に刑法の適用はない？
そんなこと言って、善男善女からだまし取ってませんか？

皆さん、お賽銭を上げてお願いする時は、相手をよく確かめてからにしましょう。神社ならどこでも同じだからと考えていませんかね？

さて、神様たちの会議の場は、出雲大社と摂社上宮となっていて、よくわかりませんが、分科会に分かれて議論でもするんでしょうか？

1 週間の間の神様方の宿泊場所は、境内の東十九社、西十九社と呼ばれる建物で、長屋の形の宿泊施設です。八百万もの宿泊者、もとい、宿泊神ではぎゅうぎゅう詰めですかね。
下の右の写真は、東の十九社。

それにしても、私たちの向こう 1 年の運命は、ここで決められるんですかね。
出雲大社に行かれる予定がある方、運命が決まってからでは遅いですから、旧暦 10 月 10 日より前に行ってお願いしてください。

神様方、17 日に、一週間の会議が終わるとすぐ地元に帰るのか、というとそうではなくて、これもよくわからないのですが、神様方は、20 日に出雲大社から松江の北にある「佐太神社」に移動して、まだ何か議論するみたいです。
旧暦 10 月 25 日には、それも終了して、神等去出（からさで）の神事が行われ、神様方を地元にお送りする「神送り」が行われます。

ここで、私が見過ごすことができないのは、18、19 日の日程が明らかにされていないことですね。
神様たち、この間何をしてるのですかね。
ひょっとして、紅葉見物？　慰労ドンチャン会？　親善コンペ？　神様でも大国主系は人間に近いですからねぇ。

ところで、昔は、出雲の国造は、この期間、身を隠していたそうですが、今もそうなんですかね。どうも大国主系の神様と天照系の出雲国造家は昔から仲が悪いみたいですね。

あ、言い忘れていました。
以上のことは、公式文書で明らかになっていること、神迎え神事、神等去出(からさで)の神事の部分以外は、すべて噂です。

信憑性？
神様は秘密を漏洩されませんので、まあ、信じない方が無難ですね。

この件について、もっと信憑性のある情報をお持ちの方、是非、お知らせください。

11.20　片時雨

今日の夕方、通り雨がありました。

今まで晴れていた青い空から、突然の雨です。
まだ、周りは明るく、ちょっと先の丘の斜面には陽が当たっています。

「片しぐれ」ですね。
頭上、1/3 が青い空、2/3 が灰色の雲に覆われた空。

「時雨（しぐれ）」というには少し早いような気がするけれど、夏ならきっと「日照雨（そばえ）」。
子供の頃は、「狐の嫁入り」とか「天気雨」と言ってましたね。

夏の「狐の嫁入り」の場合は、頭上の雲はほとんど無く、空全体が明るくて、雨粒も輝いていて、ときおり、虹が架かっているけれど、この晩秋の季節では、お狐さんもお嫁入りするにはちょっと寂しい。

この時期だと「片時雨」というのですね。
昔の人は、良い名前を付けますねぇ。

狐の嫁入りも片時雨も、どちらも「通り雨」。
すぐにやんでしまいます。

長い人生の間に、ときどき出会う不意の不幸せのようなもの。
若い頃は、狐の嫁入りなんて言っていられたけれど、
人生、秋の季節になって出会う通り雨は、ちょっと自分のいる場所がどちらかにずれていれば出会わずに済むだけに、濡れると心が冷えてくることがあります。
どうして自分だけが雨に遭うの？

でも、どちらも、通り雨。
ちょっとだけ、我慢をして、やり過ごせば、すぐにまた陽が出てくると思います。

ところで、狐の嫁入りには、少し悲しい民話が残されています。

昔、日照りで苦しむある村のこと。
雨乞いのために、狐を生け贄にしようと考えた村人達が、若い村の男のところに、狐の娘を騙して嫁入りさせようとするのですが、優しいその男は、狐の娘に本当のことを告げ、逃がそうとします。しかし、前からその優しい男が好きだった狐の娘は、それでもその男に嫁ぎ、村人達に殺されてしまいます。

天気雨は、晴れて雲一つない空から降ってくる狐の娘の涙なのだそうです。

夏の日照雨（そばえ）に、このような話を創り、
冬から秋にかけての天気雨に、片時雨という美しい言葉を創り出してきた、私たちの祖先達を、私は誇りに思っていますし、なんとかこのような言葉を守っていきたいと思っています。

英語では、天気雨のことを「Sunshower」というのですが、この言葉からは、即物的な現象しか見えないなと思うのは、私だけでしょうか。

ところで、ちょっと、趣旨が違うけれど、私の好きな歌の中に八代亜紀さんの「涙恋」があります。

♪　夜の新宿 裏通り
　　肩を寄せあう 通り雨
　　誰を恨んで 濡れるのか
　　逢えば切ない　別れが辛い
　　しのび逢う恋　なみだ恋

最後は、なぜか、歌謡曲の話になってしまいました。
スミマセン。

11.30　里の秋

♪　静かな静かな　里の秋
　　お背戸に木の実の　落ちる夜は
　　ああ　母さんとただ二人
　　栗の実　煮てます　いろりばた

これは、私たちの世代なら誰でも知っている「里の秋」
木の実の落ちる音さえ聞こえる静かな田舎の一軒家に、母と子、二人で黙って囲炉裏の火で栗の実を煮ている光景は、静寂さを通りこして、寂しさが感じられます。

ところで、そろそろ冬なのに、どうして秋の歌？

この歌の原題は「星月夜」。
この曲が作られたのは、1941 年。太平洋戦争が始まった年でした。

しかし、この歌が世の中に出るのは、それから 4 年後の 1945 年の 12 月。
手元にある資料では、この歌は、「外地引揚同胞激励の午后」というラジオ番組の中で、歌手川田正子さんの歌で全国に向けて放送されたようです。

太平洋戦争の犠牲者は民間人も含め、310 万人。
この放送がされた頃、いわゆる外地にいた日本人の数は 660 万人と言われており、内地にいた国民（7000 万人）の多くは、生死の状況もわからない親、夫、子供、家族の安否を案じ、その一刻も早い無事な帰国を待ち望んでいました。

この歌は、戦に駆り出され、南の島で戦っていた夫であり父である一家の大黒柱の帰りを内地で待つ母と子の情景を歌い、当時の多くの国民の気持ちを揺さぶったものと思われます。

現在、この歌は、二番までしか歌われないのが普通になっています。

ちなみに二番
♪　明るい明るい　星の空　鳴き鳴き夜鴨（よがも）の　渡る夜は
　　ああ　父さんのあの笑顔　栗の実　食べては　思い出す

このため、この歌を聞いた今の若い人の多くは、お父さんが亡くなった母子二人の家庭の寂しい秋をしみじみと歌ったものと思っている方もいるようです。

ところが、ごく稀に、三番が歌われますと、

三番
♪　さよならさよなら　椰子の島　お舟にゆられて　帰られる
　　ああ　父さんよ御無事でと　今夜も　母さんと　祈ります

多くの若い方々は、あれっという顔をされ、次に、この歌が戦争で駆り出されて南の島に出征した兵士の帰還を待ち望む歌だと気付いて、眉をひそめることが多いようです。
母子家庭の秋の歌じゃあないんだ！
とんでもありません。

ところで、この歌に登場する母子ですが、子供は女の子と思われますか、それとも男の子でしょうか。

ちなみに、昨日、新宿の紀伊国屋で見た歌の絵本では、囲炉裏の火の傍に描かれていたのは、可愛いおかっぱの女の子でした。

この歌は、1941 年の開戦当初に作られた「星月夜」を、1945 年の放送前に、作詞者が、急遽、三番の書き換えを行い、四番を削除して「里の秋」としたものと言われています。
元の歌詞は、次のようでした。

三番
♪　きれいなきれいな　椰子の島　しっかり護って　下さいと
ああ　父さんのご武運を　今夜も　一人で　祈ります

四番
♪　大きく大きく　なったなら　兵隊さんだよ　うれしいな
ねえ　母さんよ僕だって　必ず　お国を　護ります

元歌では、疑う余地もなく、男の子なんですねぇ。

でも、私は思うのです。
一番、二番を書き換えることなく、三番を修正し、四番を削除した作詞者の心中では、おそらくこの子は女の子としてイメージされていたのではないかと。

戦いに出て行った男の無事を祈るしかない、そのような心細さをひっそりと栗の実を煮る母娘の姿に託したと考える方が、正しいような気がします。

私が幼かった頃、まだ、ラジオでは、引き揚げ者の消息や尋ね人の放送をしていました。

京都勤務時代、引揚げ船が着いた舞鶴大浦湾の平桟橋の跡に佇んだとき、「岸壁の母」ではなく、この歌が自然に浮かんできたことを思い出します。

11.14　紅葉狩り

少し季節が良くなってきましたので、短い今秋のよく晴れた一日、紅葉狩りに出かけてきました。

北の国では、もう雪の便りが聞こえますが、こちらではまだ紅葉の盛りです。
紅葉は、北海道の大雪山から始まり、日に 30 ㎞ずつ、ほぼ 50 日かけて日本を南下し、九州に達するといわれていますが、その頃には北の国では初雪の季節を迎えます。

秋の季節と春の季節のどちらが好きかは、人それぞれですが、生きとし生けるものの命の息吹を感じる春を好きだと思う方の方が多いようです。
でも、人が晩年近くになると、秋の季節をこよなく愛しく感じるのもまた確かです。

次の歌は、ご存知のように、天智天皇が、春の花に彩られる山ともみじに燃え立つ秋の山とどちらが良いかとの問に額田王が「私は秋です」と応えたもの。

冬木成　春去来者　　（**冬こもり　春さり来れば**）
不喧有之　鳥毛来鳴奴　　（**鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ**）
不開有之　花毛佐家礼抒　（**咲かざりし　花も咲けれど**）
山乎茂　入而毛不取　　（**山を茂み　入りても取らず**）
草深　執手母不見　　（**草深み　取りても見ず**）
秋山乃　木葉乎見而者　　（**秋山の　木の葉を見ては**）
黄葉乎婆　取而曽思努布　（**黄葉をば　取りてぞしのぶ**）
青乎者　置而曽歎久　　（**青きをば　置きてぞ嘆く**）
曽許之恨之　秋山吾者　　（**そこし恨めし　秋山われは**）

万葉集では、大変多くの「もみじ」が歌に詠まれていますが、この額田王の歌でもわかりますように、そのほとんどは「黄葉」で、「紅葉」ではありません。

次の歌は、柿本人麻呂が妻を亡くしたときの歌ですが、

秋山之 黄葉乎茂 迷流 妹乎将求 山道不知母　（万葉集 208）
（**秋山の　黄葉(もみち)を茂み　迷(まと)ひぬる　妹を求めむ　山道知らずも**）

春の青葉の季節が移ろい、秋の別れを前にした最後の美しさの中で、先に行ってしまった愛する人のことを思う心にうたれます。

この「黄葉」が「紅葉」に変わるのは平安の時代。
一人の唐の詩人の詩が、言葉を変えてしまうのですね。

詩人の名は、白居易。
その詩は、「寄題送王十八帰山仙遊寺」（王十八が山に帰るのを送り、仙遊寺に寄題す）

旧友「王全素」が、自分のもとを去って、故郷に帰るのを送って、昔仙遊寺に遊んだ時のことを振り返り、もうあのような楽しいことは二度と訪れないと懐かしんでいる中の一節。

林間煖酒焼紅葉　（林間に酒を暖めて　紅葉を焼(た)く）
石上題詩掃緑苔　（石の上に詩を題して　緑苔(りょくたい)を掃(はら)う）

（昔、仙遊寺では、二人で、林間で散り落ちた紅葉を焚いて酒を煖めたり、石上に緑の苔をはらって詩を誌したりしたものだね。）

この詩が我が国に伝えられて以来、「黄葉」は「紅葉」となり、紅葉とお酒は切っても切れなくなり、散り紅葉を集めて焚き、酒を暖めるのは秋の風流とされたのですね。

平家物語には、白居易のこの歌にまつわるエピソードとして、紅葉を愛した高倉天皇（参照「小督の局」）が、庭に散っていた紅葉を無断でかき集め燃やして酒を温めた下僕の行為をこの詩に免じて許したという記述があります。

さて、紅葉といえば、能の「紅葉狩」。

時雨を急ぐ紅葉狩　/　時雨を急ぐ紅葉狩　/　深き山路を尋ねん

で始まるよく知られているものですが、その中で謡われる一節に

林間に酒を煖めて紅葉を焼くとかや、
げに面白や所から、巌の上の苔筵（こけむしろ）、
片敷く袖も紅葉衣の、紅深き顔ばせの
この世の人とも思はれず、胸うち騒ぐばかりなり。

とあるのも、白居易の詩を踏まえたものですから、この一篇の詩は、我が国の秋の人の心まで変えてしまったのですね。

ちなみに、「紅葉狩」は、戸隠に棲む鬼が姿を変えた上臈一行の紅葉狩りの宴に出くわした平維茂が、酒に酔って危うく命を落としかかるのですが、美しい紅葉も、油断をすると鬼に変わりますので、うっかり酒に酔って寝てしまうと、また体調を崩すことになりかねません。

なお、紅葉狩りは、鹿などの動物の狩りや蜜柑などの果実の狩りに止まらず、蛍などの美しいものを見る場合にも使われる我が国の優雅な言葉の一つです。
下の写真は、京都の真如堂。